



# ニュースレター

## 第50号

NPO法人 日本リハビリテーション看護学会

事務局案内

住 所 〒162-0825  
東京都新宿区神楽坂4-1オザワビル2F  
株式会社ワールドプランニング内  
NPO法人 日本リハビリテーション看護学会  
事務センター  
電話番号 03(5206)7431 FAX 03(5206)7757  
E-mail jrna@worldpl.jp



「ひまわりと岩木山」



「青森ねぶた」



### 挨拶

副理事長 板倉 喜子 (白山リハビリテーション病院)

今年の夏は梅雨明けが例年よりも遅くなり、その後の急激な気温の上昇が私たちの生活に過ぎにくさを感じさせています。目まぐるしく移り変わる天候の変化に、環境と体調が追いつかない方々も少なくないと聞いています。皆さまの地域、所属の施設ではいかがでしょうか。

さて、今年の5月1日から令和の時代がはじまりました。新たな元号に希望を寄せたり気分を切り替えたりと、生活のさまざまなところで人々の暮らしへ変化をもたらした歴史的な節目を迎えました。

我が国の元号の変遷のなかで、これまでの医療・介護、その分野の教育の場における“歴史的な節目”としては、どのようなタイミングに、どのような変化をとげてきているのでしょうか。人が人らしく、その人の生活がその人らしくあることを目指す中で、直接的な変化を感じる機会を提供することに、その責任と役割を意識せざるを得ません。

急激な高齢社会の到来に、制度としての地域包括ケアシステムが提言され、そのシステム構築に向けての精力的な取り組みが各地で協議され進められてきています。

「変化すること」には現場における違和感や抵抗感を

得やすいこともあります。反対に「よくなること」への期待を持てる機会でもあります。

チャールズ・ダーウィンの有名な言葉の一つに、『最も強いものが生き残るのではなく、最も賢いものが生き延びるものでもない。唯一生き残ることができるのは、変化できるものである。』とあります。私たちが置かれている環境は変化を常とします。臨床や教育の場、それぞれの現場における『リハビリテーション看護とは』を探究し、精力的な活動を通して実績の中から生まれる変化を大切にしたいと思うところです。

秋深まる11月9日、10日には上智大学の石川教授が大会長を担い、第31回学術大会を開催いたします。テーマを『ともにささえ ともに生きる ～未来につなぐリハビリテーション看護はこの手にある～』として参加される皆様をお迎えいたします。

ぜひ、全国のリハビリテーション看護を創り、育て、協働する仲間たちと共に、充実した取り組みと探究を進めていく機会になるよう期待しております。

多くの皆さまとの語らいの場となりますよう、新たな出会いと学びの機会を楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。



## NPO法人日本リハビリテーション看護学会 第31回学術大会

【会 期】： 2019年11月9日(土)～10日(日)

【会 場】： 上智大学四谷キャンパス  
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井7-1

【テーマ】： ともにささえ ともに生きる  
～未来につなぐリハビリテーション看護はこの手にある～

【大会長】： 石川 ふみよ（上智大学総合人間科学部看護学科教授）

【対 象】： 学会員・看護職・介護士・その他医療関係者・リハビリテーションに関心のある方

【H P】： <http://jrna31.net/index.htm>

NPO法人日本リハビリテーション看護学会 第31回学術大会長 挨拶 石川 ふみよ  
(上智大学総合人間科学部看護学科教授)

このたび、上智大学において、2019年11月9日(土)・10日(日)に、第31回学術大会を開催する運びとなりました。第31回の学術大会は、新しい元号となつてのはじめての大会となります。本大会は、新たな時代にどのようなリハビリテーション看護を展開するのかを確認する機会にしたいと思ひます。新たな時代は、人口の減少、それに伴う高齢化率の上昇はすでに予測される場所ではあります、平成にこれほどまで大規模災害が多いとは考えもしなかつたように、未知の部分も多々あります。そこで、私たちは日本リハビリテーション看護学会のこれまでのあゆみを振り返り、そこで示された新しい時代のための実践知を確認し、未来に向かって進んでいくこととなります。未来につなぐリハビリテーション看護は、今、私たちのこの手にあるのです。

2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。本大会は、同じく東京で開催されるため、障がい者スポーツを意識したプログラムを企画しました。また、ケアサイクルの質の保証のために、リハビリテーション各期における最新の実践と前方・後方との連携に関する情報を共有する機会を設けました。多くのみなさまとお目にかかり、意見交換できることを楽しみにしております。

アクセス：JR 中央線、東京メトロ丸ノ内線・南北線 / 四ッ谷駅 麴町口・赤坂口から徒歩5分



## 「発病から2年半、今思うこと」

山根裕之 (37才) 2019.8.22

10年先も20年先も、子供たちの成長を見守って、家族5人で幸せに暮らしていけるのだと思っていました。しかし、「死にたい。どうやったら死ねるのだろうか…」毎日この事ばかり考えていたのは34歳の時、体を全く動かす事が出来なくなった病院のベッドの上でした。

2016年12月、ギラン・バレー症候群を発症しました。病院に行くとすぐに人工呼吸器が装着され、今までに経験した事のない恐怖を覚えました。現実を受け入れる事ができず看護師さん達に当たる日々。痩せ細り、オムツを付け、管だらけになった姿を3人の息子たちだけには絶対に見られたくないと思っていました。3ヶ月ぶりに会った子供たち、姿を見た瞬間、涙が溢れ出しました。予想外にこんな姿のお父さんを見ても怖がる事はなく嬉しそうでした。その日を境に幼稚園で書くお父さんの絵はスーツを着た絵から、ベッドで呼吸器を付けて寝ている姿に。その絵を見た時、自分は父親なんだ、寝ている場合じゃないと少し前を向くことができました。



それから1カ月後、リハビリ病院に転院し、食事も口から摂れるようになり、車椅子に座れるようになったりしました。しかし、自分で車いすを漕いで移動する事はできず日常生活はまだまだ全介助。現実を受け入れたくない気持ちの方が大きく、心の中は暗闇のままでした。



発症から1年半が過ぎ自立訓練施設に入所し、車椅子の職員さん、同い年の車椅子の利用者さんに出会いました。障がいを障害とっていないその自然な姿に、自分は逃げている事に気がきました。施設で生活していく中で、患者から利用者になり、元の自分に戻っていく感覚、心の暗闇に光が射し込み、晴れていく感覚がはっきりと分かりました。

そして発症から2年半が経った今年4月、職場復帰する事が出来ました。復帰前、何気なく自分にある職員さんが掛けてくれた言葉を今でも大切にしています。「職場の方はどうですか？仕事って突然自分が抜けても意外と何とかなっているでしょ。でも子供さん達のお父さんの代わりはいないんですよね。」焦って急発進しようとしている自分に送ってくれた、メッセージです。

僕は、人生において少し回り道をしたのかもしれませんが、そこで出会った沢山の方々が、自分を大きく育ててくれました。もし過去に戻る事ができるなら、あの日、あのベッドで横たわって、恐怖に押し潰されそうになっている自分に会って言ってあげたい。「大丈夫、心配するな、これから最高のたくさんの出会いが待っているから。」と。

しっかりと前を向き、子供たちや誰かの道標になれるよう成長していきたいと思っています。





## 認定看護師活動報告

NTT東日本伊豆病院 脳卒中リハビリテーション看護認定看護師 市川 真

脳卒中リハビリテーション看護認定看護師となり、初回の更新審査を今年行いました。日々の看護実践では、患者の画像から症状・障害を考え、日常生活での影響を予測・アセスメントしながらケアを行なっています。高次脳機能障害のある患者には、患者自身の障害の気づきを日常生活動作や言葉の中から観察し、段階に応じた指導・ケアを提供できるよう多職種で連携をとりながら実践しています。

私の病院がある静岡県東部・伊豆地域では2010年に脳卒中地域連携パス協議会が設立され、登録病院の脳卒中リハビリテーション看護認定看護師が集まり、「認定看護師会」が発足しました。現在12名の認定看護師が集まり、事例検討会や脳卒中予防教室等の活動を定期的に行っています。地域の看護師からアンケートをとり、ニーズの高かった「高次脳機能障害の看護」や「基本動作の介助方法」等の研修は「実践にすぐに結び付けられる」と好評でした。地域住民に対しても「脳卒中予防10か条」を用い、脳卒中発症予防のための市民健康講座や健康相談を開催しています。また、「身体抑制のない地域にしたい」という思いから、身体抑制に関するエビデンスの探索や周知、地域の身体抑制に関するデータの提供や抑制解除に向けた他施設での取り組みを共有しています。

脳卒中患者の早期回復を支援するためには、自施設だけでなく地域の脳卒中看護に対するニーズを把握し、課題を解決する必要があります。地域全体のケアの質が上がるよう活動の場を広げていきたいと考えています。

## 施設紹介

### 兵庫県立リハビリテーション西播磨病院

看護部長 高濱 正子



兵庫県立総合リハビリテーション西播磨センターは兵庫県の西播磨の自然に恵まれた環境に設置されています。リハビリテーション西播磨病院100床（回復期50床・障がい者病棟50床）は、開設以来14年目を迎えました。「地域とともに歩み成長する」という運営理念のもと、西播磨・中播磨圏域の急性期病院等との密な医療連携により脳卒中、神経難病、運動器疾患、脊髄損傷などの患者さんに対して高度専門的なリハビリ医療を提供し、早期在宅復帰をめざしています。また、SPECT、MRI等を駆使した認知症の鑑別診断は年間1,000件を超え、西播磨圏域の認知症疾患医療センターとして県下でも実績をあげています。

2018年9月に開設した「神経難病リハビリテーションセンター」では、当院がこれまで実践してきた先進的なリハビリテーション治療と研究に加え、相談、情報提供、研修・養成、患者会への支援等、パーキンソン病を中心とする神経難病患者さんやご家族の方々、困りごとが緩和できるサービスの提供に努めています。今年度は、在宅療養をしながら実施できるリハビリテーション方法や療養支援ツール開発の足掛かりとして、パーキンソン病の特徴的な症状に応じたりハビリ方法を動画にまとめホームページで公開する予定です。また、パーキンソン病の看護師による集団訓練など、当院の特長を生かした目的別入院コースの設置に向けて準備を進め、センターの充実を図っています。

## 編集後記

日本の本州の最北端にある青森は短い夏の祭りを終えると、次第に秋の足音が聞こえてきます。夏祭りの観光客が乗船する豪華客船の汽笛を聞きながら…これから来る長い冬景色を思い描いています。自然界は実りの秋を迎えますが、わが職場も人財が実りますように来年に向け後半をスタートします。

青森新都市病院 佐藤 泰子